

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：32716

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00148

研究課題名(和文)K. プリングスハイムが日本の音楽文化にもたらしたもの 書簡の整理・分析にもとづく

研究課題名(英文)Contribution of Klaus Pringsheim (1883-1972) to Japanese Music Culture: Based on Analysis of His Letters

研究代表者

酒井 健太郎 (Sakai, Kentaro)

昭和音楽大学・オペラ研究所・准教授

研究者番号：60460268

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：COVID-19のパンデミックのために当初計画した研究ができなくなった。そこで、その時点で可能な研究目的・手法に切り替えて、以下を実施した。

(1) 先行研究を整理・検討することで、これからの研究課題を抽出(確認)した。(2) プリングスハイムが遺した大量の書簡のうち、取り寄せが可能な分について収集・分析し、彼が日本と海外の音楽界を繋ぐ役割を果たしていたことを確認した。(3) 彼が関与した音楽公演に関する資料を収集し、それをもとに公演記録を整理した。(4) 彼の弟子等にインタビュー調査をおこなった。(5) プリングスハイムに関する研究コミュニティを形成した。(6) 関連領域についての調査・研究をおこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

クラウス・プリングスハイムは1931年の来日から1972年の死去までのほとんどの期間を日本を拠点として活動した。つまり彼は戦前・戦中・戦後の40年間の日本の音楽史を通して経験した稀有な外国人音楽家である。近代日本の音楽文化に対する西洋音楽の影響は甚大である。これは単に「作品が伝えられた」という「点」で語られうるものでなく、人材育成、環境整備、演奏・鑑賞・評価などのプロセス、つまり「線」で捉えなければならない。プリングスハイムはその全てに関わっていた。彼を研究の対象とすることで、彼の眼を借りてこの40年間の日本の音楽史を見直すことができ、新たな歴史叙述が可能になる。本研究はこの一端を成した。

研究成果の概要(英文)：The COVID-19 pandemic made it impossible to conduct the originally planned research. Therefore, I changed the research objectives and methods that were feasible at that time, and conducted the following.

(1) By reviewing previous studies, I identified and confirmed the issues to be addressed in future research. (2) I collected the copies of letters left by Pringsheim, which were available at that time, and confirmed that he played a role in connecting the music worlds in Japan and abroad. (3) I collected materials related to musical performances in which he was involved and organized performance records based on them. (4) I conducted the interviews with his students, researchers, and a descendant. (5) I formed a research community on Pringsheim. (6) I conducted research in related fields.

研究分野：文化論・芸術学

キーワード：音楽界のリエゾン 公演記録 人的ネットワーク 「呼び屋」 音楽プロモーター 柳澤健 国際
放送 書簡

1. 研究開始当初の背景

クラウス・プリングスハイム Klaus Pringsheim (1883-1972 年) は、早くから音楽教育を受け、長じてヨーロッパ各地でオペラやオーケストラを指揮した。ワーグナー家を含む著名人との交際がある、裕福なユダヤ系家庭の出身であったことや、彼がグスタフ・マーラーに師事したこと、双子の妹カチャがトーマス・マンと結婚したことなどがあって、彼には幅広い人的ネットワークが築かれた。

1931 年、彼は東京音楽学校の外国人教師として来日した。以来、死去までの約 40 年間、途中シヤム(暹羅、現タイ)に約 1 年半、アメリカに約 5 年間滞在した他は、日本を拠点に活動した。そのうち、特に戦後の彼の活動はあまり注目されてこなかったが、どうやら彼は彼の人的ネットワークを活用して、日本の音楽界と海外の音楽界の橋渡しをしていたらしい。それは表面に出ず、注目されにくいだが、それが欠けると物事の実現が困難になる大切な役割である。

近代日本の西洋音楽の導入は、楽器・楽譜などのモノや音楽創作・演奏のスキルの輸入であっただけでなく、歴史や「場」など音楽のコンテクストの受容でもあった。音楽のコンテクストは「ひと」によって伝えられた(明治期の「お雇い外国人」はその一例である)。日本の「ひと」は、新来の音楽を咀嚼し、伝統的な「楽」との折衷を試み、場合によっては伝統的な「楽」を棚上げして、音楽文化を形づくっていった。このように「ひと」に注目すれば、国境を越えた「ひと」と「ひと」の交流は、近代日本の音楽文化の形成・変容の前提条件であった、ということになる。

プリングスハイムは音楽のスキルとコンテクストを運んだ。それに加えて、彼が「ひと」と「ひと」を繋ぎ、交流を可能にした事例が少なからず認められる。プリングスハイムは音楽領域の国際的な人的交流におけるリエゾン の役割を果たし、それにより日本の音楽文化の形成・変容に寄与したと言えるのではないかと、これが本研究の大きな「問い」である。

2. 研究の目的

本研究は以上の問いに実証的に応答することを目的とする。具体的には、まずプリングスハイムがやり取りした約 3,000 通の書簡を整理・分析し、彼の人的ネットワークの広がり把握する。次に、人的ネットワークを利用することで彼が果たしたリエゾン の役割を具体的に解明する。これらにもとづき彼が日本の音楽文化にもたらしたものを、特に日本の音楽上演史に着目して考察する。(以上は研究開始当初の目的である。)

3. 研究の方法

本研究の開始当初には以下を研究方法として設定していた。ただし COVID-19 のパンデミックにより実施不可能になったものがあり、研究の目的と方法を再設定することとなった。このことについては次項で述べる。

プリングスハイムが遺した書簡の調査(海外で実施)

プリングスハイムを直接知る人物へのインタビュー調査(主に国内で実施)

資料整理、翻訳、読み取り、目録化、人的ネットワークの見取り図の作成・公開(国内で実施)

以下の 5 つのトピックを設定し、これらに関わる資料を集中的に収集・分析し、考察する。

- a. 1967 年の大阪国際フェスティバル 大阪バイロイト(《トリスタンとイゾルデ》と《ヴァルキューレ》)への関与の解明
- b. 1961 年の東京世界音楽祭(東京文化会館開館記念)への関与の解明

- c. 日本とタイを音楽でつなぐ活動への関与の解明
- d. 日本人音楽家の海外留学支援の解明
- e. 日本の音楽界にもたらしたものの（日本上演史における位置づけ）を考察

4. 研究成果

前項で述べたように、本研究は COVID-19 のパンデミックのために、海外での資料調査など、主要な部分の実施が不可能になった。そこで、この状況下で可能な研究として以下を実施した。それぞれの活動の成果とともに記す。

(1) 評伝等の文献の記載事項の整理・検討

プリングスハイムの評伝・年譜（以下に挙げる）を始めとする文献の記載事項を整理した。その結果、特に第2次世界大戦後の活動（拠点は1946-51年にアメリカ、1951-72年に日本）については詳細が十分に明らかになっておらず、殊に彼が日本の音楽界とヨーロッパの音楽界を繋ぐ役割を果たしたことについては、まだ検討されていないことが明らかになった。

[評伝]

- 加藤子明『日本の幻想：芸術家クラウス・プリングスハイムの生涯』、乾元社、1950年。
- 早崎えりな『ベルリン・東京物語：音楽家クラウス・プリングスハイム』、音楽之友社、1994年。
- EISINGER, Ralf, *Klaus Pringsheim aus Tokyo: Zur Geschichte eines musikalischen Kulturtransfers*, München: Iudicium, 2020.

[年譜・資料集]

- 牧野一男（編）『音楽家クラウスプリングスハイム Klaus Pringsheim 1883-1972 年譜』、私家版 [牧野一男] 2015年。

(2) 書簡の分析

COVID-19 のパンデミックのために海外渡航が制限されたために、プリングスハイムが遺した書簡の調査に赴くことができなかった。当初は所蔵館が休館（ロックアウト）していたため、手も足も出なかった。2021年の末になって徐々に機能が再開されたので、遠隔複写サービスを利用して、少しずつ資料を取り寄せた。

サービスは数量に制限があり、また依頼から資料の到着まで時間がかかるため、これまでに分析することができたのはほんの一部の資料に過ぎない。したがってまだ断定的なことは言えないが、少なくともプリングスハイムが1967年の大阪国際フェスティバル 大阪パイロイト 公演に関与していたことは明らかである。

資料の中にはプリングスハイムがヴォルフガング・ヴァーグナー Wolfgang Wagner (1919-2010年、Richard Wagner の孫)、ヘルベルト・バルト Herbert Barth (1910-98年、パイロイト音楽祭の広報責任者)、村山美知子 (1920-2020年、大阪国際フェスティバル協会会長)らとやり取りした書簡が含まれている。パイロイト側、大阪側とも、複写あるいは同内容の手紙をプリングスハイムに送付していたため、そこでやりとりされている内容を把握することは比較的容易で、その内容を概述すると次のようになる。

大阪国際フェスティバルはパイロイト音楽祭の招聘初来日公演を企画した。当初は1961年に開催することを望んでいたが、その後、指輪 を全作上演する計画 (1963年)、《ラインの黄金》と《ヴァルキューレ》、翌年に《ジークフリート》と《神々の黄昏》の2年に分けて上演する計

画(1964年)が話し合われ、最終的に1967年に《ヴァルキューレ》と《トリスタンとイゾルデ》の2演目を上演することで企画が固まった(この間、1963年の日生劇場柿落としてベルリン・ドイツオペラがヴィーラント・ヴァーグナー-Wieland Wagner(1917-66年、ヴォルフガングの兄)演出の《トリスタンとイゾルデ》の上演を計画していることを知ってヴィーラントが激怒したなどという一幕もあった)。

プリングスハイムはこの間、パイロイトなどでの打ち合わせ(少なくとも1960、62、63年の3回が確認できた)に出席するほか、合唱とオーケストラを日本で用意することによって経費を節減できるという提案をなし、さらにはドイツ外務省への補助金の要請(面会および書簡にて)、大阪側が用意した合唱メンバーのオーディションの審査員と稽古(合唱指導者としてクレジットされた)、プログラム冊子への寄稿(パイロイト音楽祭の歴史、演目の紹介)などをおこなった。

以上から、プリングスハイムがパイロイト側と大阪側の仲をとりもっていたことは明らかである(ただしプリングスハイム以外に同様の働きをした人物がいた可能性は排除できない)。これをプリングスハイムが日本の音楽界とヨーロッパの音楽界を繋ぐ「リエゾン」の役割の一例としてよいだろう。

(3) 公演資料の収集、公演記録の整理

パンデミック下でも可能な研究として、プリングスハイムが関与した音楽公演に関する当時の資料18点を収集し、二次資料(復刻資料、書籍、ウェブデータベース等)16件を参照し、情報を整理した。この結果、プリングスハイムが関わった127の公演の(のべ262件のデータ)を得ることができた。これらの公演データから、以下の6点についてデータを整理・分析し、所見を述べる原稿を執筆した。

東京音楽学校と新交響楽団の公演(1931年12月-1937年7月)

東京室内交響楽団(東京室内交響楽演奏会)(1941年12月-1943年5月)

関西交響楽団定期演奏会(1954年3月-1957年1月)

オペラ公演(1932年7月-1967年4月)

日劇・帝劇(東宝)での公演(1940年3月-1943年6月)

タイ王国関係の公演

(4) プリングスハイムに関するインタビュー調査

プリングスハイムが武蔵野音楽大学で教鞭をとっていた時代に教えを受けた方々にコンタクトを取り、対面あるいは電子メールによるインタビュー調査を実施した(5名)。インタビューの様子は録画して、一部を公開することとし、インタビュー調査対象者それぞれの許諾を得た。

また、プリングスハイムの評伝の著者(2名)、プリングスハイムに関わる領域の研究者(7名)にコンタクトをとり、対面あるいは電子メールによるインタビュー調査をおこなった。対面でおこなった方には、プリングスハイムに関するスピーチをしていただき、それを録画した。そうでない方にはビデオメッセージを録画して送っていただいた。これらはいずれも上記映像の一部とする(公開することについて許諾を得ている)。

上記映像は本稿執筆現在(2023年6月)編集と公開に向けた確認をおこなっている。

さらに、プリングスハイムの孫(長男の長女)とコンタクトをとることができた。ドイツ在住のため、当初はSNSのメッセージ機能を用いてやり取りを重ね、その後、この方の来日時に面会することができた。高校卒業まで日本に住み、プリングスハイムの近くで過ごしたこの方の話は、

家族ならではの貴重な証言を含んでいた。

(5) 研究コミュニティの形成

本研究を進める中で、似た領域に関心を持つ研究者と知り合うことができ、2022年に日本音楽学会の全国大会にて、プリングスハイムに関するパネルディスカッションを実施することができた。今後は、アジア・太平洋戦争期の日本に滞在していたドイツ人音楽家(プリングスハイムを含む)の活動と日本の楽界への影響に関する学術イベント、プリングスハイムが扱われている外国書籍の邦訳、プリングスハイム作品の演奏などを計画している。

(6) プリングスハイム周辺の事項についての研究

プリングスハイムについて研究する上で、明らかにしておかないとならない事項について研究を進めた。

日本のコンサート興行主の活動史の整理

プリングスハイムはコンサートのプロデューサー、海外の音楽家の招聘に関わった。そうした活動についての研究は、日本のいわゆる「呼び屋」「音楽プロモーター」等、コンサート興行主の活動を参照する必要がある。そこで日本のコンサート興行主の活動の歴史を、二次文献をもとに整理した。その一環として、それに関する書籍の書評を執筆・発表した。

日タイ文化交流の歴史

1937年に東京音楽学校の教師としての契約が満了した後、プリングスハイムはシャムに拠点を移した。彼はシャム政府芸術局の顧問として、シャムに西洋音楽の学校を設立する計画に携わったとされる。そうした活動がどのような環境においておこなわれたか、その一端を示すものとして、当時の日本とシャム/タイ間の文化交流の一環として、両国間でおこなわれたラジオの国際放送に関しての調査結果を報告する原稿を作成した。

プリングスハイムと関係があった日本の人物について調査

プリングスハイムが日本の音楽家・関係者にどのようなネットワークを有していたか明らかになっていない。そこで、直接の接点があったことが明らかになっている宮城道雄(とその盟友とも言える吉田晴風)、柳澤健らに注目して、文献調査を実施した。このうち柳澤は外交・詩/文芸・出版など多方面で活動した人物で、1950年発表のプリングスハイム評伝の著者である加藤子明と師弟のような関係にあったとみられる。また1951年に「愛の運動音楽祭 プリングスハイム記念音楽祭」が開かれたが、その委員長を務めたのは柳澤と長く交友関係にあった田中耕太郎(当時最高裁長官)であった。こうした人物について文献調査を進め、その成果を報告する原稿を執筆した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 酒井健太郎	4. 巻 6
2. 論文標題 1930-40年代のラジオ放送による日タイ交流に関する調査報告	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日タイ言語文化研究	6. 最初と最後の頁 175-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 酒井健太郎	4. 巻 84
2. 論文標題 書評 井口淳子著『亡命者たちの上海楽壇 租界の音楽とパレエ』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋音楽研究	6. 最初と最後の頁 154-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 酒井健太郎	4. 巻 12
2. 論文標題 「book review 野宮珠里『新芸とその時代 昭和のクラシックシーンはいかにして生まれたか』人文書院、2019年」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 音楽芸術マネジメント	6. 最初と最後の頁 83-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 酒井健太郎	4. 巻 14
2. 論文標題 「『ウタノエホン（ナンポーバン）』（1943年、朝日新聞東京本社）の発見と「内地版」との比較」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 音楽芸術運営研究	6. 最初と最後の頁 5-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 酒井健太郎	4. 巻 4
2. 論文標題 1930年代の日タイ文化交流事業への柳澤健の関わり：柳澤健研究(3)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新世紀人文学論究	6. 最初と最後の頁 295-310
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 酒井健太郎	4. 巻 15
2. 論文標題 クラウス・プリングスハイム(1883-1972) が関与した日本での公演の調査	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 音楽芸術運営研究	6. 最初と最後の頁 81-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計3件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 丸山彩、酒井健太郎
2. 発表標題 戦時下の唱歌普及の取り組みとその成果：唱歌《日本のあしおと》を題材に
3. 学会等名 東洋音楽学会第70回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kentaro Sakai
2. 発表標題 Cultural Exchange between Japan and Thailand in Early 1940s: focusing on the attempts by Ken Yanagisawa", New Perspectives on the History of Japanese-Thai (Siamese) Relations
3. 学会等名 JSA-ASEAN, The 7th Biennial International e-Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 酒井健太郎
2. 発表標題 パネルセッション「クラウス・プリングスハイム（1883-1972）の事績に関する新たな観点：歿後50年に際して」
3. 学会等名 日本音楽学会第73回全国大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

酒井健太郎の倉庫「プリングスハイム研究」 https://sites.google.com/site/kensaka1974/pringsheim

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------